したい．それは，ライシャワ大使刺傷事件につづく1965年の精神衛生法改正までとなるだろう．これに並行して写真資料集もだしたい．これは，いままでとりためたスライドがある．

国会図書館でのデジタル化がどこまですすむか，は気がかりである．精神病者監護法前の問題として，旧相馬藩主の監禁・入院をめぐってあらそわれた相馬事件がおおきい．当時この事件につきだされた本は，あつめただけでも40冊をこえるだろう．財産横領をねらった陰謀と主張する旧藩士錦織剛清側のものは，記録文学あるいは実録として，2冊が文学全集にはいっている．そこで，相馬家側の『晴天白日相馬実伝』（1893年）をいれたかったが，すでにデジタル化されているというので，これをいれることは中止した．

ただ，今回の資料集でも，そこにいれたものの多くは，国会図書館にははいっていない，小部数の，あるいはいわば“局所的な”ものである．デジタル化がすすんでも，こういった資料集の必要性はかわらぬのであるまいか．

（2010年1月例会）

書籍紹介

篠田達明 著
『日本史有名人の臨終図鑑』

今まで「徳川将軍家十五代のカルテ」「歴代天皇のカルテ」等の好著を世に送られた篠田達明氏が送り出したカルテシリーズ第3弾．

雑誌「歴史読本」に連載したものの集大成であるところから，「れきどく」養生所の名前を付けて，そこで扱った患者のカルテを公開するという形式を取り，作者である篠田氏がそこの院長という設定で診断を下している．

総数111人の臨終直前のカルテであって，わずか8歳で亡くなった7代将軍徳川家継から，96歳で亡くなった牧野富太郎までを取り上げている．順序として，20歳代までに亡くなった人々9名，30代で亡くなった人々11名，……90代で亡くなった人々4名というように年齢ごとに紹介する．それこそ日本史上で有名な将軍，武将，政治家，作曲家，参謀，歌人，俳人，公卿，詩人，小説家，画家，浮世絵師，あらゆる職種の人々を網羅する．

表現には1人物ごとに見開き2ページをあて，要領よくにまとめようとしているが，何分スペースに制限があって全貌を尽くしきれない不便もあったと思われる．

右ページは，主人公の死亡年齢とともに，生涯を短く簡潔に語っている．

たとえば樋口一葉の欄では，25歳で死んだこと，18歳の頃から女戸主として苦労のなかに一家を支え，頭痛肩凝りが持病となり，不朽の名作を遺したが，明治29年の春頃から喉の不調を訴え，夏には39度の高熱が表れ肺結核の診断を受ける．森鷗外の紹介で東大病院の青山教授の診察を受けたが，すでに絶望的で11月23日不帰の客となった次第を述べている．

一方，左ページは全面枠組で，共通した様式をとっている．大別して上下二欄になっていて，上欄は保険証をもとに病院受け付けが記入する受診者欄であり，下欄は医師が記入する病状欄である．受診者欄には，氏名・生年月日・出身地・現住所・診療日・父母・職業など．病状欄はさらに分かれて，家族歴・既往歴・現病歴・現症・留意点および今後の方針・臨床診断名・担当医名の欄が設けられている．一見して明瞭，興味のある欄を見ればよい．担当医欄には，実際に治療にあ

たった医師がわかっている場合はその名前，それと必ず著者の名前が併列されていて，他医の診断にとらわれず著者自身独自の見解を述べている点は好感が持てる．

先の樋口一葉の場合について言えば，受診者欄では戸籍名が書かれていて奈津または夏であったことが知られる．家族歴には長兄が24歳の若さで肺結核で死亡したこと．現病歴では明治29年3月頃から肺結核をわずらい，8月には重症の診断を受けたという．臨床診断名は重症肺結核．留意点および今後の方針の欄に，結核は恐るべき病気で，栄養休養が大切，せっかく高利貸しから「妾になれ」との誘いがあったのだから援助交際に踏み切るのも一法と書かれてある．これは筆のゆき過ぎか．本の題に臨終図鑑とあるのに臨床場面の描写がなくて，ただ25歳の若さで不帰の客となったという説明文で終わっているのは物足りない．もう一踏張りがほしい．

ここで思い出すのは，ほとんど同じ書名で書かれた山田風太郎の「人間臨終図巻」である．あまりにも似ているので，著者には申し訳ないが，ここで比較させてもらう．

風太郎の「臨終図巻」が出たのは1986・1987年のこと．徳間書店から上下2巻で発刊された．2001年には文庫化されて，徳間文庫でⅠⅡⅢの3巻として広く読まれるようになった．この方は紹介された人物は総数913名に及ぶ．ただしモーツァルトとかナポレオン等外国人265名も含まれているので純粋の日本人は648名．対象は本書と同じ年齢順になっていて，15歳で死んだ八百屋お七から泉重千代121歳まで．職業としては，本書と同じで多岐にわたるが，中には清水次郎長とか高橋お伝等までがはいっている．

風太郎の臨終図巻では，一葉の死を描くとき，臨終に近い頃，わざわざ彦根から病床を訪れた馬場弧蝶が辞するとき「ふゆやすみにまた参りましょう」といったのに対して，高熱で紅潮した顔の一葉が「その時分にはわたしは何になっていましょう，石になってでもいましょうか」と切れ切れに呟いたという話や露伴や緑雨，鷗外がそれぞれの形でその死を傷んだ姿を伝えている．一葉が高利貸しの手に落ちなかったことを風太郎はむしろ喜んで「死は一葉を汚辱から救った」と祝福を与えている．

本書はそれに比べて，やや娯楽的，一般向きで，医史学的史料を求める人には不満を与えるかもしれない．

（杉浦　守邦）

［新人物往来社，〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2　相互麹町第1ビル，TEL. 03（3221）6032，2009年12月，A5判，255頁，1,600円＋税］

海原　亮 著
『近世医療の社会史　知識・技術・情報』

本書は，近世医療（本書の論考の射程時期は近世中期から近世後期である）の実態を文化史的・社会史的な課題意識と方法によって精緻に考察した大作であり，おそらく近世期の医療社会像を構造的に検討した研究としては本邦屈指のものであるといってよいであろう．著者の海原亮氏は東京大学大学院人文社会系研究科博士課程を修了され，本書のもととなった「近世社会における医療環境の研究」において博士の学位を取得され，現在は住友史料館研究員を務めている．

本書は近世中期から後期の医療実態を広範に対象としているが，それはいわゆる通史的な概観ではなく，近世医療の重層的な構造を描出することを意図し，ほぼそれに成功している．その成果は，「医療主体者」の観点からみて，いわゆる庶民層（本書の場合は有産識字階級を主たる対象としており，厳密な意味での「庶民」とはややニュアンスが異なる）の養生意識の萌生とそれへの対応と